

# 第3回 代理コード

## テンションコード構造

第1回にて示したテンションコードの構造処理では結果を覚えておくことが重要です。

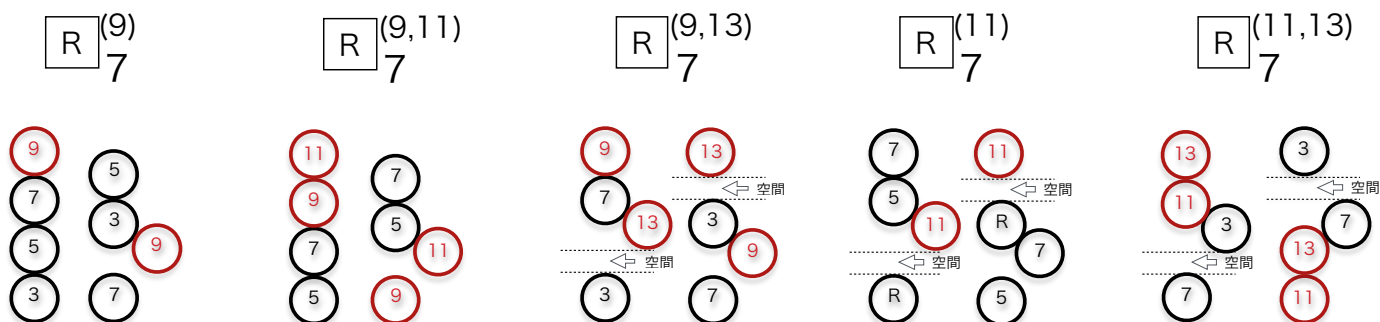
4way professional piano positionでも示したとおりテンションコードは付加されるテンションに応じて積み上げられる度数と形が決まります。構造処理に必要なOmit(省略)の法則とともに説明します。この形を覚えればあらゆるコードを弾くことができます。

Tension-Omitの法則

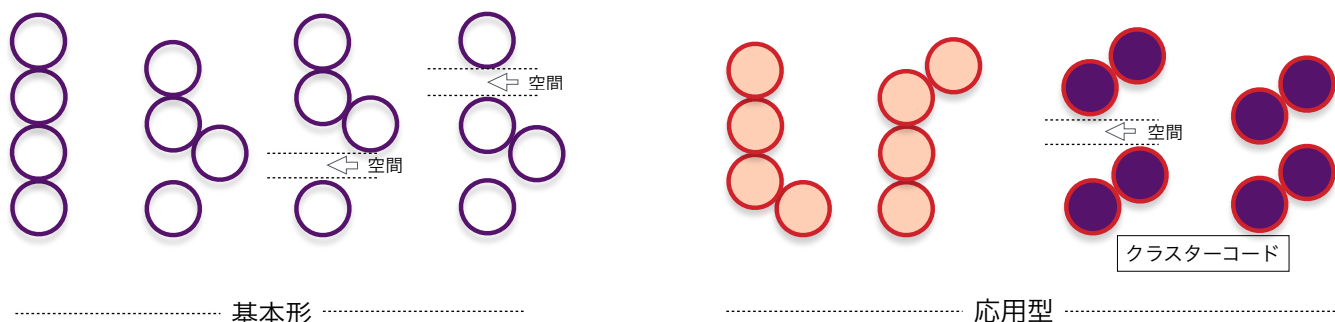
Tension	Omit音
9th	R
11th	3rd
13th	5th

例外

$\begin{pmatrix} 11 \\ 13 \end{pmatrix}$  Tension時には[R, 5th]をOmit



積み上げられるコード型は基本形と応用形に分けられます。通常制作時には基本形をなるべく用います。応用形を用いる時にはそのサウンドが確実に必要であるという確固たる根拠を持つ必要があります。

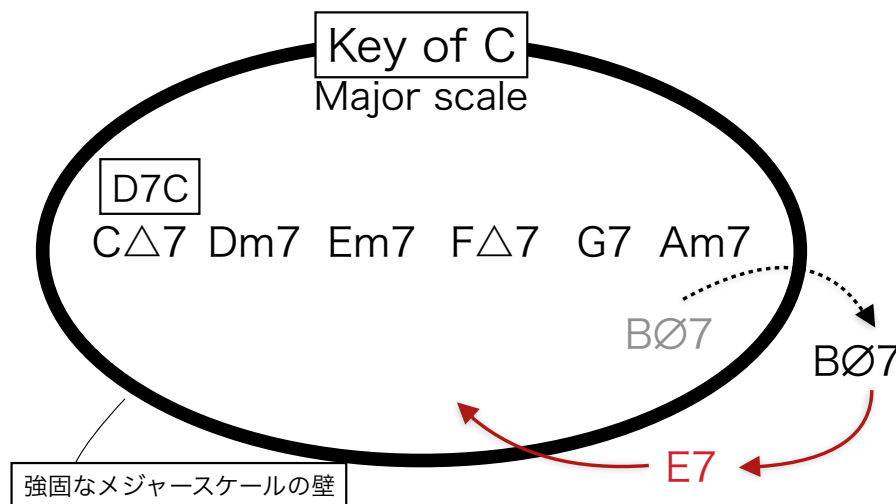


### 【Tips】 クラスターコード

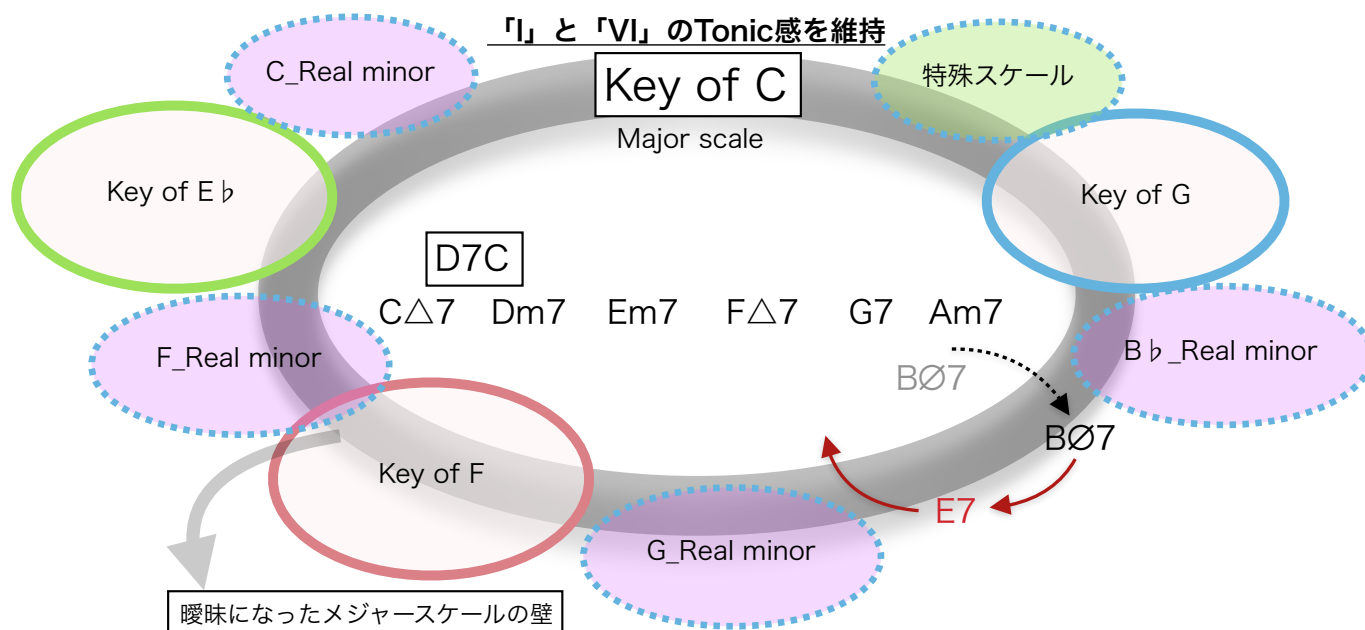
2度で音が積まれてぶつかっているところをクラスターと呼びます。特にクラスターが2つある形をクラスターコードと呼び、極めて「密度が高く固まっている」となります。わざと意図するサウンドとしてのみ用いられるべきコード型と言えます。

## Key(調性)の概念変化

音楽理論1にて学んだKeyとはメジャースケールで作られる音の世界そのものをイメージしています。:Cで説明すると「白鍵だけの世界=:C」で、黒鍵要素が入ると:Cから離脱します。このときVII $\emptyset$ 7(B $\emptyset$ 7)は特殊な存在で構造が白鍵のみであるにも関わらず異常インターバルを持つのでIII $\flat$ m7をドミナントコードに強化したIII7に進行しなければなりません。いままでの「2次元的音楽世界」ではメジャースケールの壁は極めて強固です。



借用コードやセカンダリドミナント、これから学ぶReal minor scale systemなどは元のKeyと一緒に使うものです。様々な要素が入り混じった「3次元的音楽世界」ではいままでの強固なメジャースケールの壁は曖昧な存在となります。この時、Keyの決定とはメジャースケールそのものであるという状態から、「I」の音を明るく「VI」の音を暗く感じるTonic感覚が維持されている状態と移行します。このTonic感覚の位置が「I」「VI」からずれてしまったときが「完全転調状態」です。



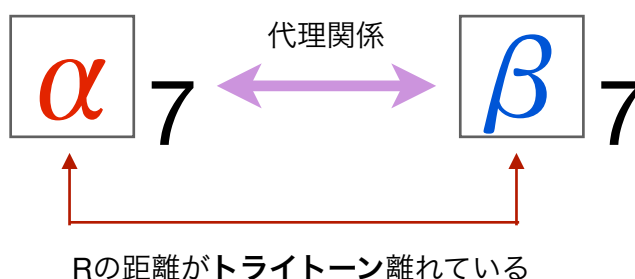
元Key以外の様々なKeyや要素が入り混ざり、メジャースケールの強固な壁のイメージは崩れ、曖昧な存在となる。絶対的な:Cから「なんとなく:C」というイメージになる。

## ドミナントコードの特権：代理コード

これから学んでいく上でとても重要な要素に「ドミナントコード」があります。(参照：音楽理論①p59) ドミナントコードは7つもの対応スケールがあり、様々な状況に応じてそれら対応スケールを使い分けていく事になります。事実上これからの主役級コードとなります。このドミナントコードは他にはない特権とも言える「代理コード」という特別機能があります。この仕組みを理解し使えるようになると一気にレベルが上がり、自由転調への足がかりとなります。

### Substitute chord (代理コード)

次のような関係のドミナントコード同士を代理コード、または代理関係にあるといいます。これを通称「裏コード」といいます。



代理コードは以下の6組で全部です。

C7 — G $\flat$ (F $\sharp$ )7	F7 — B7
D7 — A $\flat$ (G $\sharp$ )7	G7 — D $\flat$ (C $\sharp$ )7
E7 — B $\flat$ (A $\sharp$ )7	A7 — E $\flat$ (D $\sharp$ )7

### 代理コードの仕組み

Rootがトライトーン離れているドミナントコード同士は、コード内部のトライトーン[M3-m7]を共有します。

	C7	F $\sharp$ 7(G $\flat$ 7)
R	C	F $\sharp$ (G $\flat$ )
M3	E	A $\sharp$ (B $\flat$ )
P5	G	C $\sharp$ (D $\flat$ )
m7	B $\flat$	E(F $\flat$ )

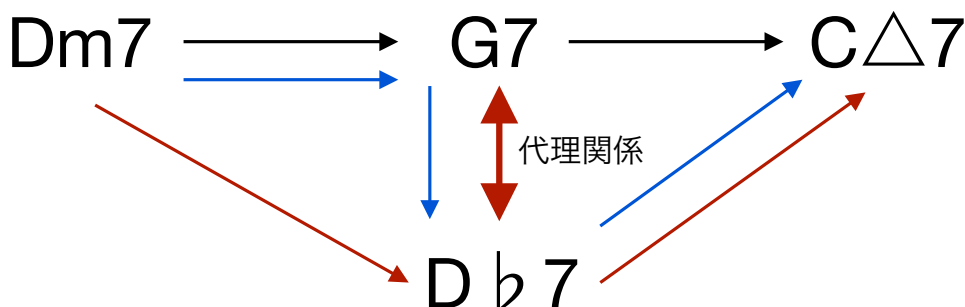
内部トライトーンを共有

Dominant motionのメカニズムである「トライトーンからの解決」が一緒になることから、この代理コード同士は極めて近い性質を持つ等価のコードとなりコード進行においては次の特徴を持ちます。これは代理コード同士のみの特徴です。

以下を同時選択できる

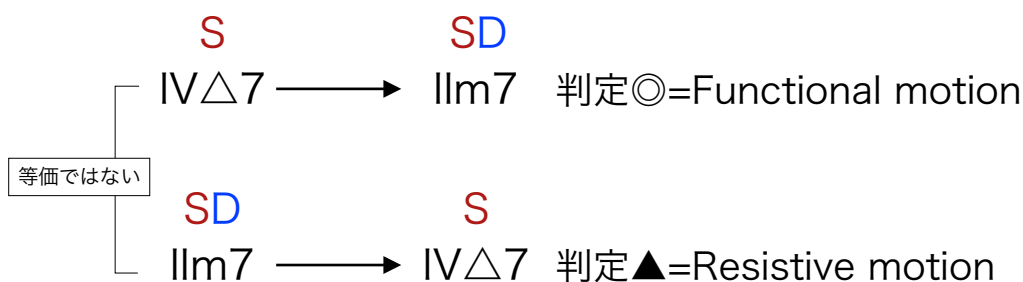
- ・代理コードに置き換えることができる。
- ・代理コードに進行できる。

ex.



### Topic 本当の代理コード

一般に流布している音楽理論での代理コードとは「IVΔ7-IIIm7」のような機能的な代理として説明されています。本書ではこれを「機能代理=低級代理」として区別しています。対して裏コードの関係は「内部トライトーン共有による代理コード=高級代理」です。これは「IVΔ7-IIIm7」の機能代理では決して等価値にはなっていないことを原因としています。



### [3Ex-etude1]

p10、セカンダリドミナントII-V化のコード進行を基に代理コードへ変換したもの。

C $\Delta$ 7    B $\emptyset$ 7    E7<sup>(b9)</sup>    Am7    Gm7    C7    F $\Delta$ 7    Am7    D7<sup>(9)</sup>    G7<sup>sus4</sup>    G7

C $\Delta$ 7    B $\emptyset$ 7    B $\flat$ 7    Am7    Gm7    G $\sharp$ +7    F $\Delta$ 7    Am7    A $\sharp$ +7    G7<sup>sus4</sup>    D $\flat$ +7

### [3Ex-etude2]

代理コードへの置き換えだけでなく進行も伴った例。2段目の6小節目「D $\flat$ +7」は1段目6小節目「Dm7/G=G<sup>sus4</sup>7(9)」の代理と見たもの

F $\Delta$ 7    E+7    A<sup>(9)</sup>m7    A7    Dm7    Dm7/G    C $\Delta$ 7    C7

F $\Delta$ 7    E+7    B $\flat$ 7<sup>(9)</sup>    A<sup>(9)</sup>m7    E $\flat$ 7    Dm7    D $\flat$ +7    C $\Delta$ 7    G $\sharp$ +7